

平成 17 年度富山県文化審議会（第 1 回、第 2 回、第 3 回）の意見要点

1 文化活動への幅広い県民の参加

ア 身近なところで優れた文化を鑑賞する機会の充実

- ・文化から排除せず、様々な人たちのアクセスを保障する。（伊藤委員）
- ・創造する人と享受する人を出会わせていかに創造性を開発するかが課題（池上委員）
- ・享受する側にも、鑑定し、本物を見分ける「目利き」が重要（伊藤委員）
- ・美術館がもっと町に出て行き、もっと若い人々に親しんでもらえる場にすべき（石川委員）

イ 新しい文化の創造への支援

- ・創造する人間や創造の成果を享受できる人づくりが課題（池上委員）
- ・享受する側のリーダーになっていくような目利き、批評といったような視点の育成（伊藤委員）
- ・子どもたちは指導者と運命共同体であり、指導者の育成が大切（土合委員）

ウ 文化を通じた交流・文化活動への参加の拡大

- ・今の世の中は、個々が孤立化し引きこもる時代だが、そうした人をどのように文化の魅力によって町へ出てきてもらい、交流させるかと言うことが大切。（池上委員）
- ・高齢者、障害者が文化に参加できる権利を保障していく。（伊藤委員）
- ・芸術と文化というものをもう少し多角的な角度で繋いでいくような形での NPO 等、市民が参加していくような仕組みを作っていくこと。（伊藤委員）
- ・インターネットの中でどのような交流を仕掛けていくかということも必要になる。（伊藤委員）
- ・富山県立文学館の創設、あるいは文学館という独立したものでなくても、コーナーなり、ワンフロアでもよいのでそういう可能性がないか。（畠山、吉田泉委員）
- ・富山県は図書館が日本でいちばん普及率が高い県なので、図書館をもっとうまく活用しなければならない。図書館というものをうまく活性化をさせる政策というものが、結果的には文学館に変わる。（伊藤委員）
- ・一番大事なことは、文化情報ネットワークを支える人たちを作っていくということ。技術よりも、文化を残す、文化を伝えたいという意識を持ってその活動に取り組む人たちをどう作るかだと思う。（山西委員）

- ・歴史的な町並みや集落は素晴らしいものがある。岩瀬の町など町並みを再生することによって、ガラス造形の方、陶芸家、食文化に係わる方が入ってきて活動している。(上野委員)
- ・地域に密着した空き店舗等気楽に文化活動の発表の場を設けることが望ましい(上野委員)
- ・賑わいの場を取り戻すこと、コミュニティを再生することは、文化政策の根本的な課題(池上委員)
- ・人が歩いて、楽しくくつろげるような文化とか芸術といったうまいのあるまちづくりが必要(池田委員)

エ 次世代を担う子どもたち、青少年の文化活動の充実

- ・子どもに対する教育、教化、啓蒙といった視点が乏しい。また、地理と歴史が弱くなっているという子どもの現状に対する視点があってもよい。(吉田泉委員)
- ・子どもを子ども扱いせず、かなり若いときから本物にぶつかっていかせる必要があると思う。(吉田会長)
- ・博物館、美術館、科学館等文化を担う様々なミュージアムと教育が連携することで、興味・関心を持たせながら科学的思考力や問題解決能力を育成できるのではないかと。(山西委員)
- ・情報技術が発達し、若者や子どもが「創造」という行為に極めて簡単に接することができるようになった現在、子ども扱いせず「次世代のクリエイター」と考えることが大事。(池上委員)
- ・子どもは、最初に出会ったものがつまらなければ芸術嫌いになってしまうという意見に賛成。幼いときから一流の芸術作品に接することが大切。(舟本委員)
- ・作り手よりも見る側を育てなければ文化はなかなか伝わらない。学校の教育現場で地域行事に親子が参加するものに取り組んでいただきたい。(堤谷委員)
- ・学校で総合の時間に地域と連携した活動を行っているが、トップダウン的に方針を出さないと、なかなか学校の中では難しいのではないかと。(山西委員)
- ・より多くの鑑賞者を作っていくことが大事。次代を担う子どもや若者にもっと重点を置いた表現と、これからの施策について協力いただきたい。(舟本委員)
- ・「国際ポスタートリエナーレ」をもう少し県民に周知できたら良いと思う。学校からも、もっと来て見ていただきたい。小・中学生、高校生、若い人に来て見ていただきたい。(石川委員)

- ・3歳から始めたバレエも、中学校へ行くと部活動に入らないといけないため続けられない。部活動は学校教育の一環であって、その環境の中で自分がやってきたものをなかなか次に積み重ねていくことができない。(可西委員)
- ・今年、県立博物館、美術館等が無料になったが、なかなか利用には繋がっていない。(高畑委員)
- ・親子で一緒にやるということが非常に大事なのではないか。学校で子どもだけというのではなく、先生も、親も含めて一緒にやるということが必要。(若林委員)
- ・産業構造の転換により、サービス業中心の社会に。子どものうちからどれだけ優れた芸術に触れているか、体験しているか等が国や地域の競争力を決定(平田委員)
- ・さらに、子どもたちの育成のため、文化、芸術の環境づくりに努めたい。(可西委員)
- ・小さいうちから、感性が豊かなときこそ、文化を経験させてあげるのが重要(大谷委員)
- ・子どもたちはすごく純粋で心が真っ白であり、それに色をつけていくのが大人の働きかけである。子どもの興味が湧くような働きかけをすべき(堤谷委員)
- ・中高生は大人の作品を見ることや一般の方に活動を見てもらうことで育つ。(高畑委員)
- ・学校教育で、間違った教育をしてしまうと、芸術離れをしてしまう。そういうことにならないよう教育を考えていかねばならない。(斎藤委員)
- ・生け花には、精神的なものも含まれており、そういったものを学校教育で教えていただきたい。(酒井委員)

2 質の高い文化の創造と世界への発信

ア 優れた舞台芸術の創造と世界への発信

- ・富山県の財産や誇りとして共有できるようになれば、本当に素晴らしい。(斎藤委員)
- ・質の高い創造者を育てるためには、優れたリーダーが必要。優れたリーダーのそばで、その人の仕事の仕方を見て、共に仕事をするのが一番勉強になる。(斎藤委員)
- ・国際的な競争力。富山のブランドイメージを高めるために、芸術、文化で何か発信していくことが重要(平田委員)
- ・県の役割は、人材育成とネットワークづくり、人材派遣に絞り、国際発信力を持った作品づくりにもっと力を入れてもいいのではないかと。(平田委員)

イ 特色のある国際的な文化振興事業の展開と発信

- ・「国際ポスタートリエナーレ」は世界に誇れるポスター公募展である。(石川委員)
- ・子どもたちの文化交流によって世界平和に繋がる。(舟本委員)
- ・日本文化を評価したり、気づいたり、自慢に思ったり、そしてそれとは違う外国のものに対して尊敬を払うことに気づいていくことも必要(斎藤委員)

ウ 富山固有の伝統文化の発掘と県民による再認識と発信

- ・芸術文化のコーディネートのためには、県内の他地域の文化や伝統芸能を知ることでも大事。曳山、街並み、獅子舞などを紹介し、地域の文化、伝統芸能を広め、コーディネートするのが県の立場ではないか(上野委員)
- ・コンテンツを作る際には、その土地その土地が世界に発信したい物語性(例えば、ノーベル街道、ぶり街道)を中核に持つことが大事だと思う。(畠山委員)
- ・県ゆかりの作家の生原稿など富山にまつわる歴史を地道に集めることは、対外的に富山ブランドを発信することと並び、我々の子孫に財産を残す意味からも重要である。(吉田泉委員)
- ・おわらは全国的に名声を博して大勢の方が来られるが、こきりこ、むぎやはおわらに負けないだけの人を呼ぶ力がある。曳山については、曳山の文化をこれだけ数多く持っている地域は全国的にみても数少ないが、倉庫に入ったままのところも結構あるので、再発掘しないと全国に発信することはできない。(上野委員)
- ・富山県には、祭りや住宅など素晴らしい文化があるにもかかわらず、その価値が県民に認識されていない。(上野委員)

エ 情報通信等技術を活用した新しい文化の創造と発信

- ・利賀、立山など数多くの世界ブランドを富山ブランドとして売り込むべきである。発達した情報技術を使って世界中に発信するには、コンテンツが必要。富山が既に持っている優れた質の高い文化をどのようにコンテンツ化し、どのようにして配信するかを10年かけて考えるべき。(池上委員)
- ・富山県は日本一の情報通信基盤を持ちながら、それを利用した文化の流通が不十分だ。例えば、県映像センターには、富山の文化・歴史の映像記録が蓄積されており、デジタルアーカイブにしたなら全国に誇れるものができる。(山西委員)
- ・富山県の大事な文化が、インターネットやケーブルテレビで居ながらにして見られるようになれば、町内会、文化活動、教育活動等に活用しやすくなって良い。(若林委員)

- ・フェスティバルがある時、創造と発信という場合に、単なる宣伝ではなく、その期間を一つの核として、食や交通、宿泊などいろいろな問題のコーディネーター的役割を県にやっていただきたい。(池田委員)
- ・利賀演劇祭の際に、ツアーのようなものがあれば参加しやすい。(堤谷委員)
- ・県内のお祭りや町並みなどを繋いで、外部に対し宣伝することも考えられる。(齋藤委員)

3 文化と他分野の交流

- ・芸術の魅力は本来、営利でなく非営利目的のものだが、質の高いものを実現してコンテンツを作り、その魅力を多くの人に伝えられれば、文化を観光に結びつけて成功したイギリスのように、人の流れを作り出して地域を変えられる。(池上委員)
- ・「最先端のものづくり文化」については、売薬や高岡銅器をデザイン業やアルミ産業に発展させてきたという富山の産業文化の特徴を明記すると説得力がある。(齋藤委員)
- ・富山県は産業文化の宝庫であり、きちんと文化として位置付けたほうがよいと思う。(池上委員)
- ・文化、自然、観光などが種々の要素を、情報通信技術等を活用して連携することが重要。行政が扱くと生活環境部、教育委員会等に縦割りにされてしまいがちであり、もっと教育委員会と連携を取るべきである。(山西委員)
- ・従来の量産型産業に代わって、個性的な産物・価値を作り出す産業が生き残っていくと考えており、「文化政策には産業政策を左右する力がある」という言い方もできるのではないか。(池上委員)

4 基本目標及や県の役割について

- ・キャッチフレーズの「富山から世界に」は、「世界が上、富山が下」のように感じられる。「富山は世界だ」がよいのではないか(齋藤委員)
- ・文化行政の推進体制は、やや細分化されていて総合化が難しい面がある。この審議会として、何か総合化の方向性を考えておく必要を感じる。(池上委員)
- ・富山県では、文化行政が平成11年に教育委員会から知事部局へ移ったことで、文化活動者にとってやりやすい体制になったと感じる。(舟本委員)
- ・文化行政は一種のコーディネーターだと思う。文化財、福祉、建築など様々な領域にまたがり、また、自治体、NPO、企業など組織の壁を超えたコーディネートが求められる。隠れた文化資源を引き出し、創造的成果を作り出すとともに、コンテ

ンツ化し配信して人を呼び込める力量を持ったコーディネーターを10年かけて育てられたら素晴らしい。(池上委員)

5 計画の期間について

- ・計画期間は10年ということだが、10年経たないと実現しない計画ではなく、5年くらい経った時点で一定の実現が見える計画にしたい。(吉田会長)
- ・5年後くらいに何らかの形でその進行状況を確認できるような形に(伊藤委員)
- ・5年という期間にある程度、もう少し重きを置いて計画を組み立てたほうがいい。(吉田会長)
- ・成果が有効に形に現れるように、5年というのが時間的にいちばんいい。(上野委員)
- ・5年は一つの区切りだと思う。(金山委員)
- ・文化を語るときに、もっと長いスパンで遠くの未来を見据えた考え方で文化というものを捉えていかなければならないのではないか。(舟本委員)

6 その他

- ・富山県は、何事にも先頭を走っているいろいろな作ってきているが、継続していかない点が不満であり、その辺をぜひ提言に入れてほしい。(山西委員)
- ・「出かけない理由」の「出かける時間が少ない」と「関心がない」というのは同じことではないか。(金山委員)
- ・アートマネジメントという形で芸術を支える人材育成をこの10年行っているが、人材を育てても地域で就職できないという問題がある。地域で働いて、そしてまた、次の後継者を作っていけるという循環ができるような仕組みを構成していく。(伊藤委員)
- ・実際に成果を見るということを考えたとき、実行する仕組みの方が大事なのではないか。どこでもやっているやり方ではなく、富山県独自のやり方が創出できれば素晴らしい。(齋藤委員)
- ・5年後のアウトカムの状況、成果の目標というものをイメージしていく必要がある。そのために、作り手側の実態に関するデータ、文化的な産業の状況、中継し、交流し、媒介していくような、あるいは支えていくようなデータに関して、現状を把握し、目標設定する必要がある。(伊藤委員)
- ・ここに配られたものと、次にまとまって出てきたものがどれくらい違ったか、どのくらい分かりやすくなったか、どのくらい5年後にこんなふうになるというイメージができるようになったかということを、次の審議会の中で確認することになると

思う。(吉田会長)

- ・行政、学校、民間のネットワーク形成ができればと願っている。(大谷委員)
- ・プロの立場、アマの立場、ボランティアの立場で文化の捉え方は違う。(金山委員)
- ・文化に経済的な効果を求められる状況にはむなしさを感じる。(金山委員)
- ・日本はちまちましている。思い切った文化行政が必要(吉田泉委員)
- ・計画を立てるときに優先順位をはっきりすべきである。(平田委員)
- ・最終的には、かなり優先順位をつけた明快な方向性が分かるようにまとめたい。(吉田会長)